くらし■家庭

「その心」500年前にも

中年版 自由研究

■謎かけ

テレビの深夜番組をぼんやり見ていたら、出演者が「謎かけが流行している」と話していた。「○○とかけて～」というあの謎かけだ。若いころ、古典的作品「ウグイスとかけて弔いと解く。心は、鳴く鳴く梅に行く（泣く泣く埋めに行く）」の見事さに心を動かされた記憶がよみがえる。これは研究しなくては。

なるほど、テレビのバラエティー番組では、謎かけコーナーが人気のようだ。お笑いコンビ「Wコロン」は、漫才に謎かけを取り込み、話題となっている。NHKラジオの番組にも謎かけの投稿コーナーがあり好評という。

今なぜ謎かけ？

言葉遊びに詳しい大阪教育大学教授の小野恭靖さんは「安上がりでだれもが楽しめる娯楽。日本語に対する関心が高まっているのが背景にあるのでは」と話す。

小野さんによると、謎かけの歴史は古い。「○○とかけて△△と解く。その心は□□」という形式は「三段なぞ」と呼ばれる。実際の言い回しは様々だが、三段なぞ的な表現は、室町時代の後半には見られるという。1518年に作られた歌謡集「閑吟集」には、「身は鳴門舟かや、阿波（逢は）で漕（焦）がるる」といった例がある。いとしい人に会えない自分を鳴門舟と解いている。格調が高い。

江戸時代には謎かけが大ブームになった。大阪では、冊子や瓦版を出す版元が、謎かけの作家を抱えていたほど。明治期以降は、落語の枕などに取り入れられるなどして、伝わってきたという。

Wコロンもいいが、我々の世代になじみ深いのは、歌謡漫談の「東京ボーイズ」だ。「謎かけ問答で解くならば～」という「なぞかけ小唄」を聞いたことがある人も多いだろう。歌い続けて35年ほどになるという。東京の浅草演芸ホールを訪ね、仲八郎さんと菅六郎さんに話を聞いた。

「ステージでは、謎かけで20分以上盛り上がることもあります。日本人は言葉遊びが好きだとつくづく思います。意外なものが結びつく瞬間が心地いいんでしょう」と仲さん。

2人に作品の一つ「都はるみという歌手を謎かけ問答で解くならば、大福食べたい気持ちです。あんこにつばきもでてくるよ」を歌ってもらった。ウクレレと三味線の伴奏が味わいを深める。

「時事問題も扱うため、ニュースには常に関心を持ちます。頭の体操にもなりますね」

言葉遊びに関する著書がある東京都江戸川区立平井西小学校校長の井上典子さんは、「言葉遊びは子どもの語彙も豊かにする。謎かけを親子で考えると、コミュニケーションもとれますね」と話す。

実作に挑戦したが、これがなかなか難しい。まず、通勤時に目に入るものをお題に。「マンホールとかけて、不祥事を起こした専門家と解く。四角（資格）はないでしょう」「駅のホームとかけて、いかさま賭博と解く。賭（駆）けると危ない」。……微妙な出来だ。1週間考え、「中年版自由研究とかけて、水出しコーヒーと解く。沸か（若）さなくて、黒う（苦労）する」をひねり出してみた。

確かに頭の体操になる。中年にもお勧めです。

文・伊藤剛寛
写真・安斎晃

＊「中年版自由研究」は今回で終わります。

東京ボーイズの仲さん（右）、菅さん（左）と「なぞかけ小唄」に挑戦する伊藤記者。「いい謎かけ作品を思いついたらぜひ連絡を」と2人（東京・浅草演芸ホールの一室で）

謎かけをつくるコツ

- 基本はしゃれ。日本語は同音異義語が多く、しゃれが多い
- ある言葉から連想する文を思い浮かべ、しゃれを考える。例えば、「ウグイス」→「春を待つ」→「張るを待つ」→「筋肉痛の湿布」
- 言葉が2か所かかっているといい。「朝刊とかけてお坊さんと解く。心は、今朝来て（袈裟着て）、今日（経）読む」など
- 普段から言葉に興味を持っ